

富山で感じた心を、 舞台上で表現する。

3歳から、舞踊をはじめて。

母が主宰する舞踊研究所で、モダンダンス・クラシックバレエの指導や振り付け、研究所の運営など幅広く務めています。私が舞踊の道に進んだのは、舞踊家の母の影響です。3歳ぐらいから始め、一時は自分に向きではないかと辞めることも考えましたが、大学に入学する際、限界まで体を使うということに興味を湧き、続ける決意をしました。

育てることが、生きる喜び。

生徒に指導をしていると、徐々に一人一人の長所や適性が見えてきます。だれもがみんなダンサーにならなくてもいい、というのが私の考えで、その子が持っている才能や資質を伸ばしていきたいと思っています。実際に研究所の卒業生は、宝塚やバレエ団、劇団四季をはじめ、照明家、舞台監督、アナウンサー、小学校の先生など、多種多様な道に進んでいます。

こう見えて私の指導は、けっこう厳しいんです(笑)。それは、小さいうちに苦しいことを乗り越えて達成感を味わうという経験を積んでほしいから。強い心を養って、立派な社会人になってほしいと思っています。

一方、自宅では家庭菜園やペットの世話が趣味。植物などが成長していく様子を見るのが好きなんです。根っから私は、“育てる”ことが好きなかもしれませんね。

富山で暮らしながら、舞踊を創る。

生徒を育てることも好きですが、自分の内側から湧いてきたものを拾い集めて形にする、舞踊を創作するというのも楽しいです。

私にとって富山は、生まれ育った故郷。水も食べ物もおいしく、空が高く広く、常に季節が感じられるところが気に入っています。また、情報量の多い東京と違って、自分の判断で情報を選択できるため、知らない



うちに影響を受けてしまう恐れがないこともいいところ。時間の流れもゆったりしているので、自分の内面をじっくり見つめられます。

これまで創作に煮詰まったことがないのは、講師や主婦、地域の一人としてなど、幅のある暮らしが私の視野を広げてくれているからかもしれません。これからも富山での暮らしの中から感じとった思いを、舞台上で表現していきたいですね。

私の夢は、オーバード・ホール。

プロと同じ舞台上に立つと、人生が変わります。だから、生徒にはそういう機会を積極的に経験させるようにしています。数年前にはオーバード・ホールで上演された市民参加型のミュージカル「ショウ・ボート」に参加させていただきました。生徒一人一人にとって、かけがえのない経験になったと思います。

来年には研究所が創立50周年を迎えます。その節目にはオーバード・ホールのような素晴らしい舞台上で踊りを発表したい。それが、今の夢です。



和田伊通子さん

この連載では、富山で活躍するさまざまな方の「アメイジング(驚くほど素敵)」な富山について掲載します。また、WEBサイトでは皆さんのアメイジングなエピソードも募集しています。
▶詳細は、「アメイジング トヤマ」で検索してください。



▲WEBサイト

和田伊通子(わだ いつこ)さん
和田朝子(母)に師事。筑波大学(舞踊方法論)卒業。平成11年度とやま賞、第62回全国舞踊コンクール創作舞踊部門第1位、東京新聞大賞、文部科学大臣賞、現代舞踊協会賞など受賞。